

日本学術会議中部地区会議ニュース

No. 144

2018. 3

I. 平成 29 年度第 2 回日本学術会議中部地区会議運営協議会

(於 名古屋大学)

II. 学術講演会 (於 名古屋大学アジア法交流館 2 階 アジアコミュニティフォーラム)

「ジェンダー問題に関する日本学術会議の取組」

三成 美保 (日本学術会議副会長、奈良女子大学副学長)

「フィールド研究におけるジェンダー」

竹中 千里 (日本学術会議連携会員、名古屋大学大学院生命農学研究科教授)

「ジェンダーと政治、家族を考える」

武田 宏子 (名古屋大学法政国際教育協力研究センター教授)

III. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

「実証科学と人文学の学際的研究プロジェクト」

大平 英樹 (連携会員：名古屋大学大学院情報学研究科教授)

「創造性の七不思議」

永井 由佳里 (連携会員：北陸先端科学技術大学院大学副学長)

IV. 日本学術会議中部地区科学者懇談会コーナー

「日本学術会議第 175 回総会報告記」

和田 肇 (日本学術会議第一部会員、科学者懇談会愛知県幹事、名古屋大学副総長)

○平成29年度第2回日本学術会議 中部地区会議運営協議会議事録

開催日時 平成29年11月3日(木)
10:30～11:40
開催場所 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ2階
レクチャールーム

出席者 【日本学術会議中部地区会議運営協議会委員】

戸田山和久(名古屋大学大学院情報
学研究科教授)

松井 三枝(金沢大学国際基幹教育
院教授)

松宮 徹(金沢大学大学院自然科
学研究科客員教授)

西村 直子(信州大学学術研究院社
会科学系教授)

高橋 雅英(名古屋大学理事・副総
長)

村田真理子(三重大学大学院医学系
研究科教授)

巽 和行(名古屋大学物質科学国
際研究センター特任教
授)

【日本学術会議中部地区科学者懇談会各県幹事】

竹内 章(富山大学名誉教授)

森 寿(富山大学大学院医学薬
学研究部教授)

福森 義宏(金沢大学理事)

山本富士夫(福井大学名誉教授)

奥村 幸久(信州大学大学院工学系
研究科教授)

鈴木 滋彦(陪席:静岡大学副学長)

松田 正久(愛知教育大学名誉教授)

和田 肇(名古屋大学副総長)

【日本学術会議事務局】

斎藤 敦(日本学術会議事務局企
画課学術研究団体等調
査分析官)

桑原 佳代(日本学術会議事務局企
画課広報係長)

【陪席】

吉田 雄介(名古屋大学研究協力部
研究支援課長)

小出 信吾(名古屋大学研究協力部

研究支援課専門員)

新宮 陽子(名古屋大学研究協力部
研究支援課研究総務係
長)

吉田 有希(名古屋大学研究協力部
研究支援課研究総務係
員)

西 弥生(福井大学総合戦略部門
研究推進課課長補佐)

鎌田 康裕(福井大学総合戦略部門
研究推進課研究協力係
長)

議 事

1. 中部地区会議運営協議会について

戸田山代表幹事から、10月1日より、日本学術会議第24期となり代表幹事が交代した旨の挨拶があった。次いで、日本学術会議事務局及び陪席者の紹介があった。

別途、鈴木静岡大学副学長(静岡県幹事就任予定)に陪席いただいている旨付言があった。

2. 地区会議代表幹事の報告

戸田山代表幹事から、第一部会員である和田愛知県幹事に説明を求め、和田愛知県幹事から、資料3-1に基づき、10月2日～4日に開催された第175回総会について、各種提言の提出について会期終了間近の本年6月以降に集中しており検討を行う時間がないため、早めに提言を提出してもらえよう改善していきたいとの説明があった旨報告があった。出席者から、提言提出後、提言はどのように検討されるのかとの質問があり、日本学術会議事務局齋藤調査分析官から、政府内または社会全般で検討を行っていくものであるが、各提言のフォローアップについては課題となっている旨、説明があった。提言に関し、出席者から、1) シンポジウム等開催後に提言を作成するため、会期の終わりにならざるを得ない、2) 提言の使い方について参照基準があると役立つ等、種々の意見があった。

日本学術会議事務局齋藤調査分析官から、資料3-2に基づき、総会の補足と総会後の動きについて説明があった。課題別委員会及び分野別委員会について、メンバーの人選が進んでい

るとの報告があった。

3. 学術講演会について

戸田山代表幹事から、後刻の「各県幹事との打合せ会」で、学術講演会の進め方等について審議したいとの説明があった。

4. 地区会議ニュースについて

戸田山代表幹事から、資料4に基づき、次号(No.144)発行のための原稿執筆者について検討したいとの提案があり、次のとおりとした。

○会員コーナー関係記事：名古屋大学から2名推薦依頼（代表幹事へ一任）

○科学者懇談会コーナー関係記事：和田 肇（科学者懇談会愛知県幹事：総会報告）

なお、締切りは1月中旬頃とし、別途、文書でも依頼することとした。

松田幹事長から、事務局へ過去の地区会議ニュースの保管状況の確認依頼があり、次回会議で、事務局から報告を行うこととなった。

5. 平成30年度中部地区会議事業計画（案）について

戸田山代表幹事から、事務局に説明を求め、吉田研究支援課長から資料5に基づき、中部地区会議の平成30年度事業計画案について説明があった。

6. 次回地区会議の開催について

戸田山代表幹事から、資料6に基づき、次回地区会議の開催について、持ち回り順により福井県に依頼することになる旨提案し、これを了承した。なお、開催時期については、当番校で調整した結果、平成30年7月6日（金）を予定している旨案内があった。

7. 科学者懇談会各県幹事との打合せ会

松田幹事長から挨拶の後、資料8-1、8-2に基づき、新会員の加入、静岡県幹事の交替、長野県幹事の就任について提案があり、これを了承した。次いで、科学者懇談会会員を増やすため、連携会員宛に加入のすすめの送付について提案があり、これを了承した。

午後の学術講演会については、別添の式次第に基づき実施する旨説明があった。なお、司会

及び閉会挨拶は和田愛知県幹事（名古屋大学副総長）が担当する旨説明があった。

また、4月に開催される日本学術会議総会には、次回開催県である福井県幹事に傍聴を依頼することとした。

○平成29年度第2回日本学術会議 学術講演会 「ジェンダーと名古屋大学」

開催日時 平成29年11月30日(木)

13:15～16:00

開催場所 アジア法交流館2階

アジアコミュニティフォーラム

講師 ○三成 美保(日本学術会議副会長)
「ジェンダー問題に関する日本学術
会議の取組」

○竹中 千里(日本学術会議連携会員、
名古屋大学大学院生命
農学研究科教授)

「フィールド研究におけるジェン
ダー」

○武田 宏子(名古屋大学法政国際教
育協力研究センター教
授)

「ジェンダーと政治、家族を考える」

来場者 約90名

Ⅱ. 学術講演会

＜学術講演会要旨＞

ジェンダー問題に関する 日本学術会議の取組

三成 美保

(日本学術会議副会長・奈良女子大学副学長)

1. 国際社会のなかの日本

日本114位——世界経済フォーラムが発表した2017年のグローバル・ジェンダー・ギャップ指数(GGGI)の総合順位である。98位(2011年)、101位(2012年)、105位(2013年)、104位(2014年)、101位(2015年)、111位(2016年)。この数年、100位以下が続いており、2017年は過去最下位を記録した。順位を下げているのは、政治(123位)と経済(114位)分野である。ちなみに、健康1位、教育74位であった(いずれも2017年)。

「男女共同参画社会基本法」(1999年)の公式英訳は、The Basic Act for Gender Equal Societyである。すなわち、「男女共同参画」は「ジェンダー平等(Gender Equality)」を指す。他方、「ジェンダー・ギャップ」とは「男女格差」を意味する。『男女共同参画白書』にも毎年紹介されるGGGIが示す通り、政治・経済という「公的領域」において、日本の男女格差は国際社会と比べて著しく大きい。しかし、いっそう深刻なのは、「ジェンダー平等」の目標がないがしろにされている結果、GGGIの日本順位が低迷し続け、いっこうに改善の兆しが見られないことである。

2. ジェンダー平等に向けた国際社会と日本の取組

(1) 国際社会——「持続可能な開発目標(SDGs)」におけるジェンダー平等

2015年9月の第70回国連総会で、「我々の世界を変革する——持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。「人間、地球及び繁栄のための行動計画」としての「2030アジェンダ」では、17の「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が設定された。その第5目標には、「ジェンダー平等を達成し、すべ

ての女性及び女兒の能力強化を行う」ことが掲げられた。これに関して以下のように説明されている。「ジェンダー平等の実現と女性・女兒の能力強化は、すべての目標とターゲットにおける進展において死活的に重要な貢献をするものである。人類の潜在力の開花と持続可能な開発の達成は、人類の半数に上る（女性）の権利と機会が否定されている間は達成することができない。…新たなアジェンダの実施において、ジェンダーの視点をシステムティックに主流化していくことは不可欠である」。日本学術会議が積極的に取り組むべき課題として位置づけている SDGs において「ジェンダー平等」は重要な柱をなしているのである。

(2) 国の取組

先述の通り、GGGI の日本順位は低い。しかし、国が取組を放棄しているわけではない。男女共同参画社会基本法に基づき 5 年ごとに策定される「男女共同参画基本計画」では、第 2 次基本計画（2005 年）ではじめてポジティブ・アクションの数値目標が示された。いわゆる「202030 目標（2020 年までに指導的立場の女性比率を 30%にする）」も 2003 年に男女共同参画推進本部が決定し、第 3 次基本計画（2010 年）で盛り込まれた。2015 年には、女性活躍推進法も成立した。しかし、実態は追いついていない。政治の重要な決定権をもつ国会議員の女性比率は 10.1%（2017 年衆議院選挙）、企業の取締役の女性比率はわずか 1%にすぎない。2008 年のリーマン・ショックに持ちこたえ、回復が早かったのは女性取締役がいる企業であったことがすでに明らかになっている。このような現状について原因を分析し、比較を通して課題を検討し、未来への展望を示すのがジェンダー研究の重要な課題である。

3. 日本学術会議におけるジェンダー平等に向けた取組

(1) 日本学術会議における女性比率の向上

日本学術会議の女性会員比率は順調に上昇している。2003 年まで女性会員数は一桁にとどまったが、2017 年 10 月にはじまった第 24 期では 32.9%、連携会員の女性比率は 28.8%にのぼる。国が事実上放棄した「202030 目標（2020 年までに指導的立場の女性比率を 30%にする）」をいちはやく達成したと言えよう。量は質を変える。女性比率が増えたことによって学術会議は大きく変

わった。学術が男性だけのものではないことも十分アピールできている。では、具体的にどのような成果があるのか。

(2) 日本学術会議の活動から

学術会議にはジェンダー関連の委員会が複数ある。科学者委員会男女共同参画分科会、第一部附置総合ジェンダー分科会のほか、法学・社会学・史学の分野別委員会にもそれぞれジェンダー系分科会が存在する。これらのジェンダー系分科会の積極的な活動により、日本学術会議からのジェンダー発信はきわめて高度かつ具体的なものとなっている。たとえば、民法家族法改正、夫婦別姓、LGBTI の権利保障、女性活躍推進法、男女雇用機会均等法、女性参政権などについて、シンポジウムが開催され、あるいは、提言や書籍が公表されている。マスコミの関心が高いものも多い。

また、男女共同参画の推進に向け、多くの学協会が積極的に取り組んでいる。特に、理系の男女共同参画学協会連合には 53 学協会が属している。人文社会系は取組が遅れていたが、2017 年には GEAHSS（ギース）が発足した。今後の活躍が期待できる。国際的には、2017 年 5 月に日本学術会議と JST の主催で「ジェンダー・サミット 10」が東京で開催された。これは、国内外から延べ 600 名の参加を得て成功裡に終わった。男女共同参画分科会に小分科会を設けて「ジェンダー・サミット 10」のフォローアップに取り組む予定である。

4. 名古屋大学への期待

2015 年、名古屋大学は、国連機関 UN Women が取り組む「HeForShe」の 10 大学の一つに選定された。「HeForShe」とは、世界規模でジェンダー平等を推進する運動で、特に男性が変革の主体になることを目指している。名古屋大学の成果は、日本学術会議総会でも報告されたところである。また、2017 年には、「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」が開設された。このように、日本学術会議中部地区の拠点校の一つとして、名古屋大学が「ジェンダー平等」に積極的に取り組んでいることはまことに喜ばしい。今後は、ライブラリがいつそう発展し、地域の拠点となるだけでなく、日本や世界にも交流の場として広がっていくことを期待したい。そのためにも、他の地区会議におけるジェンダー研究拠点との積極的な連

携をはかり、「ジェンダー研究ネットワーク」を構築することが望ましい。「ジェンダー平等」を目指すための学術の推進という見地から、日本学術会議もしかるべき委員会やシンポジウム等を通じてできるだけ協力したい。

フィールド研究における ジェンダー

竹 中 千 里

(日本学術会議連携会員
名古屋大学大学院生命農学研究科教授)

1. はじめに

「理系の女性研究者としてジェンダーを語って欲しい」。これが、学術会議中部支部講演会での話題に関する和田肇名古屋大学副総長からの要請だった。「理系の女性研究者」ということばで私の脳裏に蘇ったのは、学生時代に聞いた岡崎恒子先生（現：名古屋大学特別教授）の話だった。働く女性のための保育所などほとんどなかった時代、幼いお子さんを実験室の隅においたダンボールにいれて実験を続けたという話は、女性研究者としての進路を考えつつあった私に、強烈なインパクトを与えた。いやいや、私など岡崎先生の足元にも及ばないし何が話せるのだろう、と思案した末に出てきたのが、理系 / 文系という研究分類軸に、フィールド（アウトドア）系 / ラボ（インドア）系の軸を加えた研究分類での自分の立ち位置だった。私は学生時代から、理系の中でもフィールド研究が中心だったので、岡崎先生のようなラボ系研究者とは違う切り口でジェンダーを語れるかもしれないと思い、上記タイトルを決定した。

思い起こせば、新しいフィールドワークにチャレンジする際に、「〇〇は男の世界だからね」というセリフをたびたび浴びせられた。「男の世界＝マンダム（Man Dom）」は、かつて某男性化粧品CMでよく耳にしていた言葉である。マンダムの語源は、“Man Domain”である。当時はこのことばの意味を深く考えずにいたが、今、改めてこの語源を確認したとき、まさに当時の男社会を象徴することばであったことに気づかされた。この「男の世界」をキーワードに、フィールド研究における私が経験した過去の女性の立場と、最近の状況を述べたい。

2. 「男の世界」の3事例

2-1. 海は（船上は）男の世界

環境の試料を扱う地球化学的な研究に興味を

もった私は、学部4年で分析化学研究室に配属され、「河口域の堆積物中の重金属元素の化学形態」をテーマとして研究を始めた。自分のサンプルは、河口域において小型船で採取していたため、フィールドワークにおいて「女性だから……」という扱いはなかったと記憶している。あるとき、他研究室から「東大海洋研の白鳳丸に乗ってくれる女子学生求む」という募集があり、当時海のフィールドワークに興味をもっていた私は、いち早く希望者として名乗り出た。詳しく仕事の内容を聞くと、「試料採取で白鳳丸に女子学生を乗せたいのだが、ほとんど前例がなく本人も大変なので、もうひとり女子学生を同行させたい」とのことであった。その話の中で登場したのが「海は男の世界だからね」という言葉である。聞くとこころによれば、海の神様は女性であり、船に女性を乗せると神様が嫉妬して海が荒れるので、女性の乗船は好まれない、とのことであった。当時はこの話を鵝呑みにしていたが、今回の講演にあたって世界各国の「海の神様」について調べたところ、海の神様の中で女性は少数派であることを知った。女性の海の神様は、日本神話に出てくる「宗像三女神」とギリシャ神話の「テティス」ぐらいで、ポセイドン（ギリシャ神話）、ネプチューン（ローマ神話）、大綿津見神（日本書紀）など有名な海の神様はみな男性である。このことを当時知っていたら、「海は男の世界だからね」という言葉に反論できたのに、と今更ながら残念に思う。

白鳳丸では、海水中のプルトニウムを分離・回収する作業の手伝いを行ったが、作業も船上での生活も、女性だから特に大変だったという思い出は全くなく、むしろ他大学の学生の実験や試料採取を見聞した貴重な体験が記憶に残っている。最近、この時の船上の仲間に出会った機会に恵まれたが、同じ船で寝食をともにした思い出のおかげで、時を経た今になっても親交を容易に再開できたと感じている。

私が白鳳丸に乗船した当時（1979年）は、乗船者における女性比率は非常に低かった。近年の状況を知りたくて、白鳳丸仲間である東京大学大気海洋研究所の川幡穂高教授に問い合わせデータを送っていただいた。そのデータによると、乗船者の女性比率は1990年頃から徐々に増え始め、2014年度は16%になっている。この数字は、東京大学大気海洋研究所における過去7年間の女性

研究者比率が11%～17%であることと矛盾はなく、現在は海をフィールドとする研究において、「海は男の世界」などという言葉が女性を排除することは全くなくなっていると確認できた。

2-2. 南極は男の（ロマンの）世界

博士後期課程に進学し、「海洋堆積物中の重金属元素の化学形態」をテーマに研究していた私に、あるとき指導教授（北野康教授）が依頼された南極の塩湖の堆積物試料の分析作業が回ってきた。「行ったこともない南極の試料を分析しても、結果の意味がわからない」と抗議したところ、教授は国立極地研究所に私の南極行きを交渉してくれた。その時の返答が、「女性は南極には連れていけない。南極は男のロマンの世界だから」という言葉である。南極が男のロマンの世界であることを象徴しているのが、イギリスの探検家であるErnest Shackletonによる南極探検隊員の募集広告（1914年）であろう^{注1)}。“MEN WANTED for Hazardous Journey. Small wages, bitter cold, long months of complete darkness, constant danger, safe return doubtful. Honor and recognition in case of success.” 女性には理解しかねる世界である。

国立極地研究所から拒否されたものの、ニュージーランド・ワイカト大学のチームが受け入れてくれることになり、晴れて南極の地を踏むことができた。まず驚いたのは、日本では拒否された女性が、南極の他国の基地では普通に働いていることである。私が参加したワイカト大学のチームは、私を含めて女性3名と男性1名の構成であり、またアメリカのマクマード基地、ニュージーランドのスコット基地、どちらの基地でもさまざまな職場に女性の姿が見受けられた。また、その当時まだ南極に基地を保有していなかった中国からの視察隊にも、女性研究者が参加していた。さらには、クリスマス休暇の時期に滞在したドライバレー地域のバンダ湖では、「バンダ・スイミングクラブ」^{注2)}に挑戦するアメリカの女性兵士の姿も見られた。「南極は男のロマンの世界だからね」という言葉を聞かされた日本が、どこか異次元の世界のような錯覚に陥ったことを覚えている。

その後、1987年の第29次隊で森永由紀氏（現、明治大学教授）が初めて女性として参加したのを皮切りに、日本の南極観測隊にも女性が参加できるようになり、今では女性比率が15%を超えて

いる。さらには、2018年11月に出発予定の第60次南極地域観測隊では、副隊長に初めて女性が選ばれている。副隊長に任命された原田尚美氏（海洋研究開発機構上席技術研究員）は、1991年に二人目の女性隊員として南極観測に参加している。このように日本の極地研究においても、もはや南極は男のロマンの世界ではない。むしろ、男性が求める「ロマンの世界」が希少な存在になってきていることを気の毒に思う。

2-3 山は（林業・林学は）男の世界

紆余曲折を経て、森林研究に関わることになったのが1991年のことである。地球化学的な視点で森林における物質循環を研究したいと思ったのが理由である。しかし、当時の森林研究は、「林学」という林業に結びつく学問体系が中心であった。林業は男の仕事と認識されていたこともあり、林学に関わる女性研究者の数は非常に少なかった。実は、林業の場である山を司っている神様もまた女性で、「山の神」はとても恐ろしい存在であるらしい。山の神は一年に12人の子を産むという話もあり、山が生産性の高い場であることの象徴であると受け止めることもできる。前述の「海」の事例だけでなく「山」においても、男の世界と謳われている背後には女性の神様の存在があるのは、非常に興味深い話である。

1991年当時、名古屋大学林学科の女子学生の比率は1/4以上であったのに対し、女性教員の比率はわずか7%であった。しかし、その後の積極的な男女共同参画の流れに乗り、現在の女性教員の比率は31%にまで増えている。また、林業の現場においても、近年では「林業女子」や「もりじょ」という言葉で象徴されるように、女性の従事者が増加し注目されている。林業や木材に関わる女性のネットワークを広める目的で、2016年11月に名古屋大学で開催した「「木づかい」産業における男女共同参画推進による地域活性化—中部地域をモデルケースとしたワークショップ—」（主催：内閣府・男女共同参画推進連携会議、日本森林学会、日本木材学会）では、これからの地域社会を林業や木材で支えようとする女性達の活発な交流が行われ、日本の林業の明るい未来への期待に繋がった。

3. おわりに

理工学系の学会における男女共同参画を推進する目的で2002年に発足した男女共同参画学協会連絡会では、これまでに4回の大規模アンケートを実施し、女性研究者に関わるさまざまな項目について数値データを蓄積してきている^{注3)}。2017年度のアンケート結果に基づく理工系学会における女性会員比率と総会員数との関係では、情報・工学系学会での女性会員比率が低く、生物・医薬・農学系学会で高い傾向が明確に示されている。そのデータにおいてさらに、フィールド系の研究が多いと思われる学会を見てみると、17～25%に位置し、比較的女性比率が高いことがわかる。

かつては「〇〇は男の世界」という理由で女性研究者が参入しにくかったフィールド研究の分野では、もはや男女の壁は消滅したと言っていいであろう。その理由として、フィールド研究は自然環境や生物を対象としており、女性の感性に響く分野であることが関係しているのかもしれない。今後は、フィールド研究での女性研究者のさらなる活躍を期待するとともに、情報・工学系分野において女性比率が低い原因を解明していく必要があるだろう。

注1：このErnest Shackletonによる南極探検隊員の募集広告が実際に存在したかどうかについては、未だに明らかではないらしい。

注2：正式名はThe Royal Lake Vanda Swim Club。南極ドライバレー地域にあるバンダ湖で、夏の間に湖の淵の氷が溶けたところで裸で頭の前までつかると、記念の記章が授与された。

注3：詳細は<http://www.djrenrakukai.org/enquete.html>参照。

「ジェンダーと政治、家族を考える」

武 田 宏 子

(名古屋大学法政国際教育
協力研究センター教授)

1. はじめに

2017年11月17日に行われた安倍晋三首相による所信表明演説において、「急速に進む少子化」は「国難」であると位置づけられている。より具体的に言えば、少子高齢化は日本が直面する「最大の課題」であり、「経済の成長軌道を確認可能なものとするため」には克服される必要がある。そのための方策として所信表明演説が提案するのが、安倍政権が主要政策目標として掲げている「女性が輝く社会、お年寄りも若者も、障害や難病のある方も、誰もが生きがいを感じられる『一億総活躍社会』」の建設である。このように、所信表明演説を読んだ限りでは、子供を持つことやライフスタイルのあり方、あるいは女性が「活躍すること」は、現在の日本政府にとって重要な政治課題であるらしいという印象を受ける。

2. 政治と家族／ジェンダー

こうした日本における近年の政治過程の動向を考える上で確認する必要があるのは、政治学の領域では、長い間、家族のあり方や社会で女性が活躍すること――すなわち、ある人が女性ジェンダーという属性を帯びた存在であっても各自のポテンシャルを十分に発揮して、存分に活動することができる状況が実現されるということ――は個人の私的な問題であり、「政治」が取り扱うべき問題の範囲外であると考えられてきたことである。たとえば、20世紀イギリスの代表的な政治学者であるバーナード・クリックは、現在でも世界的に読まれている著作、*In Defense of Politics*において、「政治」は利益をめぐる「公的」な対立や調停、交渉に関する活動を意味しており、したがって労働組合や職場、家族などの「私的」な諸集団で日々、起こっている対立や調停、交渉とは区別される必要があると論じている。

クリックに代表される「公領域」と「私領域」を厳格に区別し、「政治」を「公領域」における

活動に限定する考え方はリベラル・デモクラシーの伝統において長い間、影響力を持ってきた。こうした考え方に対して異議申立てを行ったのが、社会、経済、そして政治の世界に存在するジェンダー間の不均衡な関係を批判するフェミニズムに影響を受けた政治学者たちであった。キャロル・ペイトマンが議論しているように、私的領域の問題を「政治」の枠外に追いやめることは女性が日々の生活で経験する不平等な取り扱いや困難さが問題として認識されることを妨げ、その結果として、平等な市民が政治参加を通じて自らのニーズや選好を意思決定に反映させることを基本原理とするリベラル・デモクラシーの政治体制において、女性が男性に対して従属的位置を占める「家父長的」な支配構造が温存されてきた。だからこそ、ペイトマンは、「個人的なことは政治的である」という第2波フェミニズム運動のスローガンの重要性を強調し、政治をこれまでとは異なった仕方で概念化することの必要性を主張するのである。

3. 「統治性」

以上のような議論を踏まえると、それでは、近年の日本政府がことさらに「政治問題」として少子化や「女性の活躍」に注目するようになったことをどのように理解することができるのであろうか。現在、展開している政治動向は、日本政府がフェミニストたちの指摘を受け入れて、よりジェンダー平等な社会の構築を目指ようになったことを意味しているのだろうか。

この問題を考慮する際に興味深い理論的視座を提供するのが、ミッシェル・フーコーがコレージュ・ド・フランスで行った講義に由来する「統治性」の議論である。よく知られているように、「統治性」という用語はフーコーの造語であり、端的に言えば、近代資本主義国家を合理的に統治するための特定の「統治の合理性」を意味している。「統治性」型の統治システムにおいては、個人は良質な労働者であり、同時に消費者、納税者、国民である「主体」となることを促され、そのために学校や職場などの団体や制度を通じて「規律」され、他方で、健康で幸福な生活を送ることができるように社会サービスなどを通じて「配慮」を受ける。これにより、国民経済と国民国家を構成する国家の「人口」が、経済成長を促進し、国民国家を支える主体たり得る人びとによって主に構成される

ようになり、これを通じて国民経済と国民国家が再生産されていくことになる。フーコーによれば、第二次世界大戦後に先進各国で確立された福祉国家システムは、「統治性」が国家の統治システムに取り入れられた帰結であった。言い換えれば、「統治性」の観点からすれば、個人に対して一定水準の生活レベルを保障する福祉国家システムは、国家の経済システムを維持し、発展させ、それにより国家がより強化されていくための政治的仕掛けであると解釈することができるわけである。

フーコー自身は「統治性」の議論を著作などの形でまとめることなく亡くなってしまうのだが、その後、フーコーの学生たちがこの議論を引き継ぎ、更に発展させている。そうした研究成果の一つに、ジャック・ドンズロによる *The Policing of Families* がある。この本の中でドンズロは、人びとを「規律」し、同時に彼らに対して「配慮」する統治性型の統治システムにおいては、夫や子どものケアをつつがなく、的確に遂行する母親の存在が不可欠であることであると論じている。すなわち、統治性型の統治システムが機能するためには、ジェンダー役割分業という特定のジェンダー関係に基づく特定のタイプの家族が必要であり、したがって、「統治性」型の統治システムでは、家族やジェンダーの問題は統治システムのあり方に関わる「政治」問題そのものであり、実際、教育、医療、社会政策、労働などのさまざまな国家の政策の対象となってきた。この意味で、家族やジェンダーに関する問題を政治の領域から切り離して、公-私領域の分離を強調する議論は、国民国家と国民経済の家族へ依存を不可視化する、実態の伴わない「神話」であったのである。

興味深いことに、日本の近現代史を辿ると、「統治性」に通じる考え方がしばしば政策形成エリートの間で議論されており、そうした議論は、女性が「良妻賢母」型のジェンダー役割を果たす家族像と密接に結びついてきた。ここで気をつけなければいけないのは、小山静子が議論したように、「良妻賢母」のモデルは当初から、夫や子どもに黙って従い、受動的である妻／母のイメージとは異なっていたことである。むしろ、「良妻賢母」であるためには、有能な家庭の管理者／経営者であり、子どもに対する教育者の役割を果たすことが求められた。だからこそ、前田愛が指摘したよ

うに、文部卿として女子教育の改良に取り組んだ森有礼は、「国家富強の根本は教育にあり、教育の根本は女子教育にあり、女子教育の挙否は国家の安危に関係するを忘るべからず」という方針から、欧風の教育や生活習慣を取り入れることを熱心に振興した。国家の建設／発展に従事する兵隊と労働者という「人的資本」を維持・育成するためのケア行為の供給者としての女性の資質と能力に関する関心から、その後も日本政府は「生活改善運動」などの試みを通じて、女性に家庭運営の技術と知識を与え、それにより家庭生活の質の向上を目指す施策を行い、こうした政治的努力はアジア太平洋戦争をはさんで 1950 年代以降に拡大する「新生活運動」に引き継がれていく。このような歴史過程から見えてくるのは、日本においては、家族生活のあり方やジェンダー関係は長い間、「政治問題」であったということであり、そうした状況の背後には、国家の側の経済成長と国家の発展への強い関心が存在していた。このように考えると、現在の日本の政治状況は、特に目新しいことではないと言える。

4. 「統治性」の高度化と日本

とは言え、日本の状況を「統治性」の議論の観点から理解することには、一定の問題も存在している。フーコーの死後に主に英語圏において「統治性」の議論を展開したニコラス・ローズなどの論者は、製造業の衰退とそれに代わるサービス産業や金融経済の拡大といった現象に代表される資本主義経済の構造転換に伴い、「統治性」もまた高度化されたと議論しており、こうした変化の兆候として、学校や社会サービスなど社会制度の支援を受けずに、自分自身の生活を経済の合理性に合わせて最適化し、人生のチャンスを最大化する――言い換えれば、「統治性」の「規律」し、「配慮する」機能を内面化している――「起業家的」な主体が 1990 年代以降のイギリスにおいて主流のパーソナリティのモデルと見なされるようになったことを指摘している。常に自分自身の人生の最適化を目指し、実現しようとする「企業家」的主体モデルは、非常に個人主義的な人間像であり、個人の利益とならない場合は家族を形成しない、あるいは家族から退出することも厭わない。興味深いことに、イギリスの家族制度は、こうした行動パターンが可能になるように、よりフレキ

シブルで個人化された方向で変化したことが観察されている。

これに対して、日本においては、婚外子出生率の低さに示されるように、戸籍制度に基づいた結婚制度が堅固に維持されており、日本人同士の異性愛結婚家族を形成することの重要性が強調される傾向が強い。このことは、現在、提案されている「全世代型への社会保障改革」及び「女性の活躍」などの政策においても言えるように思われる。すなわち、日本の場合、資本主義経済の構造変動にもかかわらず、近代型「統治性」の家族モデルに留まろうとする志向性が観察されるが、そこに存在する論理矛盾についてはほとんど認識されていないようである。こうしたことを考えると、現在の日本において最も必要とされている政治的対応は、家族／ジェンダーをめぐる政治について根本的に問い直し、新たに構想するための努力であるように思われる。

Ⅲ. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

「実証科学と人文学の学際的研究プロジェクト」

大 平 英 樹

(日本学術会議連携会員：
名古屋大学大学院情報学研究科教授)

1. はじめに

ジャック・ヒギンズの『鷲は舞い降りた』は、戦争冒険小説の傑作である。1943年秋、ヒトラーはドイツの退勢を挽回するため英首相チャーチルを拉致せよとの密命を下す。作戦を実行するドイツ降下猟兵部隊の将兵、彼らをイギリスへ送り込む夜間戦闘機隊のエース・パイロット、潜入工作を担うIRAの闘士、そして彼らを救出するためイギリス沿岸に侵入するEボート（魚雷艇）の艇長。歴戦の精鋭ながら不遇をかこっていた男たちが結集し、不可能と思える困難な任務に挑んでいく。

この種の物語を愛好してきたせいか、さまざまな領域の専門家を集めて学際的研究プロジェクトを企画し運営することが、わりと好きである。この度、日本学術振興会の先導的人文学・社会科学研究推進事業に採択され、平成29年から3年間の計画で「予測的符号化の原理による心性の創発と共有—認知科学・人文学・情報学の統合的研究—」というプロジェクトを進めている。代表を務める私は生理心理学・認知神経科学を専門としており、認知科学、複雑系科学、ドイツ文学、西洋美術史、思想史、歴史学、情報科学の研究者が参加している。

2. 予測的符号化と心性の創発・共有

予測的符号化 (predictive coding) とは、近年、認知神経科学において優勢となった理論であるⁱ。この理論は、脳は自己と世界のモデルを構成して到来する情報を予測し、その予測と情報のずれ(予測誤差: prediction error)を基に、ベイズ的計算のような仕方で知覚経験を能動的に創り出していると主張する。この発想の起源は、19世紀の物理学者ヘルムホルツが提唱した視覚の原理に遡る。狭い中心視の範囲外では視覚像はぼやけてお

り、網膜には盲点や血管があるなど、我々の視覚装置には大きな制約がある。それにも関わらず安定した視覚経験が得られるのは、脳が過去の経験に基づいて限られた視覚信号から世界像を推論しているためだと考えられる。こうした処理は、気付かないうちに瞬時に行われるので、ヘルムホルツはこれを「無意識の推論」と呼んだ。この例のように、予測的符号化は、一般には視覚や聴覚などの知覚現象を説明する理論である。しかし最近では、感情、信念、意思決定などの高次な精神機能も階層的な予測的符号化により創発されていると主張されているⁱⁱ。

我々のプロジェクトでは、知覚、認知、感情、価値観、信念、態度など、人間のアイデンティティを形成するところのあり方を心性 (mentality) と呼ぶことにした。心性は、知覚のような低次な要素から態度のような高次で社会的な要素までが、一貫性と柔軟性を持って緩やかに統合されてできていると考えることにする。さらに、そうした個人の心性が、人間が持つ強い同調性により個人間で共有されることで「時代精神」のような社会文化的心性が構成されると考える。我々は、こうした心性の創発や共有は、予測的符号化によって実現されているという仮説を掲げた。人間は自己、他者、環境などのさまざまな対象について予測を形成し、その予測と受け取る情報とのずれ、つまり予測誤差をできるだけ縮小するように制御を行っている。このシンプルな原理に従って内的な処理や行動をした結果、統合された心性ができあがり、さらにはそれが同じ地域や時代の個人間に共有されていく、と考えるのである。そして予測誤差が閾値を超えて大きくなると、予測が更新され、新たな心性が生まれる。この仮説を、認知科学・神経科学の方法による実験研究、エージェント・ベースド・モデルと呼ばれる個人を単位としたコンピュータ・シミュレーションによる社会のモデル化、そして人文学的な文献研究により検証しようとしている (図 1)。

実験研究



図1 研究プロジェクトの概念

3. 心性を研究する方法

実験研究では、2人の被験者がお互いにキーを叩いて一定のリズムを作り上げるというシンプルな課題 (交互タッピング課題) を実行し、行動、脳活動、自律神経系反応などを測定する。被験者たちは、自己のリズムの内的モデルを形成して他者のリズムを予測し、そのずれを調整しながら互いの同調を図っていくだろう。こうした事態では、脳活動や生理的反応が同期することは容易に想像することができ、その動態をベイズ・モデルなどにより表現することも可能だろう。そうした過程から、自己と他者に関する理解やそこでの感情などの心性の基盤が生じてくるのではないかと考えている。さらには、それらの行動、脳活動、生理的反応のリズムには個人特有の周期のようなものがあり、それが類似している場合に、いわゆる「気が合う」という関係が生じるのかもしれない。この推測は、脳活動の自発的リズムの類似性により友人関係の親密度が予測できたという最近の知見ⁱⁱⁱにも通じるものがありそうだ。

シミュレーションによる研究では、個人が他者と、協力が搾取かというような単純な仕方では交渉していく、社会的ジレンマと呼ばれる事態を表現するモデルを構築する。ここで個人は、経験により他者の行動の予測を充進していく強化学習というアルゴリズムを持っており、社会の中での振る舞いを変えつつ適応していく。こうしたモデルで、いくつかのパラメータを変えつつシミュレーションを行うことで、価値観などの心性を共有する社会集団が生成し、変容していく様子を再現しようとしている。

文献研究においては、近代的な心性が生じたと考えられる18世紀の啓蒙期以後について、予測的符号化という観点からの仮説検証的なテキストの読みにより、心性の創発と共有という現象のアクチュアリティを示そうとしている。こうした発想に至ったのは、本プロジェクトに加わっていた東京外国語大学の伊東剛史先生らが上梓された『痛みと感情のイギリス史』の書評を新聞誌上で読んだことがきっかけであった。痛みや感情という主観的な経験を扱う感情史という研究領域が既に成立していることを知り、イメージングが広がって一気にプロジェクトの構想ができあがった。学際的研究では、自分の専門領域以外については素人なのであるから、この種のセレ

ンディピティが働くことがしばしばある。

もちろん、こうした仮説検証的なテキストの解釈では、先入観や予見を持ち込んでしまうことに注意せねばならない。ここで威力を発揮すると期待されるのが、文献を統計学や人工知能の技術により解析するテキストマイニングである。この手法により、文献を、実験やシミュレーションにおけるデータのように扱って、潜在的な意味構造を客観的に抽出できる可能性がある。例えば我々は、ゲーテの『イタリア紀行』の解析により、風景を見るための内的モデルが構成されていくさまを検討しようとしている。こうした新しい手法を導入することで人文学研究のレパートリーを増やすことも、本プロジェクトの目的のひとつである。

4. 終わりに

『鷲は舞い降りた』では、机上で立案された精緻な作戦が、小さな偶然から綻び崩壊していく。学際的研究の多くはコンセプト駆動的に行われるので、同じような困難を抱えている。学際的研究が難しいのは、研究領域ごとに、概念、研究方法、そして何より「価値観」や「文化」が異なるからだ。このためそうしたプロジェクトは、しばしば、個々の研究領域ごとには成果が挙げたとしても、それらを統合できずに終わる。我々のプロジェクトでも、この課題を如何に克服するかが問われる。そこで肝要なのは、よく練ったコンセプトへの関心の共有、開始時の高揚感の持続、そして互いの研究領域へのリスペクトであるのかもしれない。

注

ⁱ Friston, K. (2010). The free-energy principle: a unified brain theory? *Nature Review Neuroscience*, 11, 127–138.

ⁱⁱ Feldman-Barrett, L. (2017). *How emotions are made: The secret life of the brain*. New York, NY: Houghton Mifflin Harcourt.

ⁱⁱⁱ Parkinson, C., Kleinbaum, A.M., & Wheatley, T. (2018). Similar neural responses predict friendship. *Nature Communications*, 9, 332.

創造性の七不思議

永 井 由佳里

(日本学術会議連携会員：
北陸先端科学技術大学院大学副学長)

「創造性」には謎が多い。神話やイノベーションの芽に喩えられる。

Design Creativity and Innovation という国際誌の編集にあたっているので、週末の時間は査読チェックを兼ねて関連する研究論文を読むことに充てているが、実に様々な創造性のとらえ方がある。引用元を調べたり、異なる事例を比べてみたり・・・そうか、なるほど、ああそういえば・・・と、いつしか自分の経験を思いおこしながら、創造性をめぐる不思議を挙げてみた。

自由は不自由？

中学校の美術の授業を担当したことがある。今から25年ほど前のことで、郊外の小規模な学校で、教室で過ごすのがもったいないほど美しい景色がひろがる、恵まれた環境だった。前任者（国語の先生）から授業計画を引き継いでみると、一斉に、丸筆に黄色の絵の具を付け、背景を塗る、次に青の絵の具を薄め・・・など、全員に同時に同じ作業をさせるというもので、「え、絵の描き順に決まりがあるの？」と驚いた。しかし、そういう指導参考書も見たことがある。ともあれ、自分は別の方針で授業をしようと思案を組立てた。教室で、生徒たちの様子は程よく活発。人物、静物、風景、と年間の課題を進めていく。前任者のように描き順方式にできなかったせいか、時間内に描きあげるのがたいへんだったが、作品に個性は表れた。そして、いよいよ「自由画!」。生徒たちがさぞかし喜ぶことかと思いきや、ハタと手が動かない。何を描けばよいのか、わからない。「何でも描いてよいのですか?」「そうです。何でも好きなものを、おもいっきり描いてください」勢い込んでアニメのキャラクターを描きはじめる生徒もいれば、何を描けばよいのか頭を抱える生徒もいる。好きなようにしてよいと解放されて喜ぶとは限らないことがわかった。なぜか、自由が、創造性の縛りになる。現在、大学院での教育研究指

導をしていても、研究テーマが決まらなと悩む学生と話すたびに、自由の難しさを感じる。(関係文献: “Handbook of Creativity”, by RJ. Sternberg (edt.), 1998)

プロセス VS. プロダクト

創造性の「4C モデル」というものがある。いわゆるイノベーションのような大きな創造性を Big-C と呼ぶとしたら、誰もが發揮している小さな創造性は little-c と呼ばれる日常の創造性を指す。Big-C と little-c の間に、Pro-c という段階が位置付けられている。これは、職業上場で發現される専門的な創造性で、産業界において価値を發揮する。要するに little-c、Pro-c、Big-C は段階的に規模の大きな創造性を示すのだが、いずれも何かしらの成果物(プロダクト)やそのアイデアが生み出されることが共通する。そのため、創造性の評価には、その成果物に対する評価が用いられる。特に、Pro-c においては、その分野で活躍し、既に評価を得て、社会的に認められている人間の判定に頼る傾向がある。音楽コンクール、文学賞、等もその例といえるだろう。

では、成果物を伴わない創造性は無いのだろうか? little-c の手前にある、意欲とか前向きな気持ちとか、創造性の前段階が気になるのは当然のことだろう。その段階が mini-c と呼ばれ、創造性の育成において注目されている。創造的な意欲が習慣となることが little-c に繋がるのではないかと、思われる。ところが、それがなかなか難しい。世間ではどうしても成果物のほうに目がいくからだ。見える創造性と mini-c のように外から見えない創造性の関係は微妙で、時にコンフリクトを起こす。絵を描きたい気持ちがあるけど、一度描いてみて褒めてもらえなかった。うまくいかなかった、そういう経験が自分の mini-c を押さえてしまうのはもったいないが、そういう例は少なくない。なぜだろうか?

(関係文献: Beyond big and little: The four model of creativity, by JC. Kauffman & RA. Beghetto, 2009)

当事者研究

無我夢中で自分の仕事に打ち込み、我を忘れて没頭する。とても創造的だと周囲から見なされている人には、そのような特長があると言われてい

る。その状態がいかに幸せなものであるか、生きることの意味として説明されている。時間を忘れて制作する芸術家の姿が思い描かれる。その時、何を考えているのか、本人は意識していない。でも、高度な創造性を追究するなら、その状態こそとらえたい状態であり、その人の中で、一体何が起きているのかを知りたいはずだ。例えば、彫刻家のジャコモメッティが、寝食を忘れてアトリエに籠り、粘土をつけては削りを繰り返す日々を目のあたりにした矢内原伊作が、感じとった芸術家としての「生きること」は、生々しい記録として芸術家の内面への理解を深めてくれる。

では、芸術家である当の本人が自分の創造性を解明したいとおもったとき、どうなるのだろうか? 私の研究室で博士学位を取得した美術家は、自分で自分の創造性を観察することに挑んだ。それは大変な道のりであったことは言うまでもない。自己の観察や分析が研究として成立する条件をあらゆる角度から検討し、第三者による観察と比較しながら研究方法論を提起し、さらに研究することでより磨かれる創造性の循環構造を求めた。その結果、当事者研究のきっかけとなる面白い研究が生まれたのだが、論文と作品制作の両方を行う毎日は、耐えがたいほど辛かったようだ。本人は研究の途上で、果たして幸福感を感じえたのだろうか。

(関係文献: Finding Flow: The Psychology of Engagement With Everyday Life. by M. Csikszentmihalyi, 1998)

過去は未来を与えるか

実践は積み重ねだといわれる。創造的な実践者が、自分の技を磨くために、意識的に省察をするという報告があり、それが専門家としての優れた教育者や技能者の特長といわれている。学習においてもそういった振り返りが有効だという話は定説になっている。ものづくりやデザイン教育では、振り返りを創造技法の中に組み入れるケースも少なくない。省察が気づきを促すと言われるのはわかるが、創造性の本質を考えると、本来見るべきところは、振り返ってとらえる過去ではなく、まだ届かない未来ではないだろうか? 当事者研究の例で忘我の状態と創造性の関係を述べたが、振り返ることで、見えない未来を求める情熱や洞察力が失われることはないだろうか。

たしかに技を磨くことはより良い実践の積み重ねをもたらす。つまり熟達の過程を促す。しかし、果たして熟達者の創造性は未熟者より高いといえるのだろうか。過去をよりどころにすれば、多くの過去を振り返ることで熟達していくと説明できる。しかし、未来をよりどころにした場合は、どうだろう。いみじくも、ピカソが言ったとされる「私は子供らしい絵を描いたことがなかった。子供たちのように描けるようになるには一生かかった」ということばの意味は、熟達とともに創造性が失われることを示さないだろうか。実践を積みほど創造性が損なわれるとしたら・・・恐ろしくなったところで、葛飾北斎を思い出す。70歳過ぎてから益々創造的になった人物だ。やはり創造性は謎めいている。

(関係文献：Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions, by DA. Schon, 1990)

共感

今、「デザイン思考」が世の中に普及している。最初に「共感」フェーズが置かれることが特徴だ。問題解決はスキルを磨けばできるようになるが、問題発見にはマインドが欠かせない。イノベーションをもたらす手法として、「デザイン思考」は現状から潜在的なニーズを見出す手法として、ユーザを理解し、創造的に問題解決するステップが紹介されている。学際的なグループによるフィールドワークを基本とし、デザインする過程で思考力やコミュニケーション力が鍛えられるから、共創的な問題発見型の学修方法として有効だと考えられる。また、成果物のアイデアが実際のビジネスとして価値を生む可能性もあり、マーケティングの手法と結びつけて実践的なプロジェクト学修として取り組まれるケースも増えている。ここで生きてくる創造性は、過去の常識と異なる。ものを構造的にしっかり組立て、きっちり作り込むことや、そのための熟練した技など、これまでの工学で創造的な能力とされてきたことは特に求められない。むしろ、一定の価値観にこだわらないことや、目標が曖昧で定まらない状態をいかに保留できるかがものをいう。フレキシブルと言えば聞こえはよいが、優柔不断さが創造性を強化する、不思議な例といえるだろう

(関係文献：Design Thinking Research Making

Design Thinking Foundational, by H. Plattner, C. Meinel, L. Leifer (eds.))

実験

10年以上にわたり、概念合成によるアイデア生成の研究をしてきた。主に、実験を行い、アイデア生成の過程を捉えるのだが、元となる二つの概念の関係(距離)を条件とする方法を取った。つまり、元となる二つの概念がりんごとオレンジのように似たものを近い関係とし、船とギターのような関係を遠いものとした場合、近いものは合成しやすいが、生まれてくる新しい概念は創造的なデザインには結び付きにくい。一方で、遠い関係の二つの概念からは合成しにくいけれども、もし合成できたら創造的なデザインが生まれやすい、と仮説を立てた。二つの概念の距離を測り、近・中・遠距離の三つの組み合わせによる課題を被験者に取り組んでもらった。さて、結果はというと、大学生たちのアイデアは予想通りの結果で、近距離間の概念は合成しやすく、アイデアを出しやすいが、出されたアイデアはあまり創造的ではないと評価が低かった(外部の評価チーム)。つまりは、合成することが難しいけれども、それがうまくいけば、遠距離間の概念合成の方が創造的なアイデアを生み出しやすかった。ところが、デザインは近距離間の合成で創造的なアイデアを生み出していた。インタビューすると、「これを単純に合成してもきっとつまらないから、頭をひねって解釈を変えながら取り組んだ」とのこと。さすがは、プロフェッショナル。高い目標意識は実験の制約を超えることを目のあたりにした。一筋縄ではいかないのが創造性だ。

(関係文献：Concept Generation for Design Creativity. A Systematized Theory and Methodology, by T. Taura & Y. Nagai, 2012)

IV. 日本学術会議中部地区科学者 懇談会コーナー

日本学術会議 175 回総会報告記

和田 肇

(日本学術会議第一部会員、日本学術会議
中部地区科学者懇談会愛知県幹事、
名古屋大学副総長)

(1) 本年 10 月 2 日 (月) から 4 日 (水) まで、日本学術会議において第 175 回 (第 24 期第 1 回) の総会が開催された。松田幹事が出席の予定であったが、急遽用務が入り、欠席することになったので、私の方から簡単な報告をしたい。なお、私も、大学の用務の関係で第 1 日目しか出席しておらず、その限り (その後メール等で入手した情報も含め) での報告となる。また、今回の総会には会員として出席したので、傍聴記ではないことも、お断りしておきたい。

第 1 日目は、午前中に任命式があり (私は欠席した)、午後は新会長の選挙が行われた。第 1 回目の自由投票から京大総長の山極壽一氏が多くの得票を得、第 2 回目で過半数を占めて、そこで投票は終了するはずであった。ところが山極氏が、京大総長や国立大学協会会長職にあり、これ以上役職に就くことは無理であると発言され、辞退されたことから、振り出しに戻ってしまった。

そこで改めて第 1 回目からの投票が行われたが、第 2 回目で上位であった A さんは任務に適任でないと発言され、B さんもすでに激務でスケジュールも詰まっており、会長職が不可能であると発言され、行き詰まりの状況となった。そこで、第 3 順位におられた C さんが、副会長職や会員全員でサポートするので、山極さんに会長職を引き受けてもらうしか、事態は打開できないと発言され、山極さんが最終的に受諾の意思を示され、無事にこの議題が終了した。

このことに時間をとられ、前会長の報告や前期年次報告は簡単に済まされた。会長からのメッセージについては、大西隆「第 23 期を終えるにあたって」学術の動向 2017 年 9 月号に詳しく書かれているので、参照して頂きたい。特に社会的

な発言力の強化について提言されている。なお、会長の挨拶については、日本学術会議のホームページ上に「会長室」として公表されている。

第 23 期の第 174 回以降に、提言が 39 本、報告が 26 本出されており、活発な活動が展開されている。

(2) 第 2 日目には、以下の副会長が選任されている。

三成 美保 (第 1 部会、組織運営及び科学者間の連携担当)

渡辺美代子 (第 2 部会、政府、社会及び国民等の関係担当)

武内 和彦 (第 3 部会、国際活動担当)

第 3 日目には、各部会の専門委員会の役職も選任されているが、割愛する。

三成さんは、以前からジェンダー問題で積極的に関わってこられた方で、今回の学術講演会で講演をお願いしている。

(3) 余談を一つ。第 1 日目の夕刻に首相官邸で首相主催の懇談会があった。菅官房長官に引き続いて安倍首相の挨拶があったが、その際に多くの会員 (2 割くらいか) が I フォンや携帯で写真を撮っていた。有名人 (あるいは任命権者) だから仕方ないのかも知れないが、学者も案外ミーハーなのだと感心した。これから真剣に、場合によっては厳しい提言をしていかなければならない相手であるのではないのか、とひねくれ者の印象記である。

第23期 日本学術会議中部地区会議
運営協議会委員名簿

(平成29年10月1日～平成32年9月30日)

(平成29年11月30日現在)

関係部	氏 名	勤 務 先
第1部	戸田山 和 久	名古屋大学
	松 井 三 枝	金沢大学
	西 村 直 子	信州大学
第2部	城 石 俊 彦	国立遺伝学研究所
	高 橋 雅 英	名古屋大学
	村 田 真理子	三重大学
第3部	春 山 成 子	三重大学
	松 宮 徹	金沢大学
	小 嶋 智	岐阜大学
	巽 和 行	名古屋大学
	張 勁	富山大学
	中 嶋 英 雄	(公財) 若狭湾エネキター研究センター

科学者懇談会幹事一覧

(平成29年11月30日現在)

県名	氏 名	勤 務 先
富山県	竹 内 章	(富山大学名誉教授)
	森 寿	富山大学
石川県	前 田 達 男	(金沢大学名誉教授)
	福 森 義 宏	金沢大学
福井県	山 本 富士夫	(福井大学名誉教授)
	永 井 二 郎	福井大学
長野県	奥 村 幸 久	信州大学
	竹 下 徹	信州大学
岐阜県	土 岐 邦 彦	岐阜大学
	仲 澤 和 馬	岐阜大学
静岡県	鈴 木 滋 彦	静岡大学
	丹 沢 哲 郎	静岡大学
愛知県	松 田 正 久	(愛知教育大学名誉教授)
	和 田 肇	名古屋大学
三重県	梅 川 逸 人	三重大学
	樹 神 成	三重大学

日本学術会議中部地区会議学術講演会のお知らせ

平成30年度第1回日本学術会議中部地区会議学術講演会を
下記のとおり開催いたしますので、お知らせいたします。

記

日時：平成30年7月6日（金）13時～16時
場所：福井大学

中部地区会議に関すること
科学者懇談会に関すること

は右記へ

日本学術会議中部地区会議事務局

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学研究協力部研究支援課内

TEL (052) 789-2039

FAX (052) 789-2041

※日本学術会議の活動についてはホームページ URL : <http://www.scj.go.jp> をご覧ください。